剣道に於ける発現打突と勝利の関係性に関する研究

A study of the relationship between hitting and winning in Kendo

1K10C140　北島　泰洋
主査 平田竹男 先生　　副査 中村好男 先生

【背景】

剣道は、決められた時間内に互いに打突部位を打ち合い、２本の有効打突を先取した方が勝利する競技である。過去に６１回開催された全日本学生剣道優勝大会（インカレ）において、大会連覇を果たした大学は３校、大会連覇が成されたのは計５回と数少なく、毎年拮抗した戦いが繰り広げられている。この中で優勝できる大学と優勝出来ない大学との差は何なのか疑問に思った。経験や技術・体格の差以前に、竹刀を振る行為（発現打突）による差が勝敗に絡んでいないか。また、発現打突と勝利との関係性を証明する研究は今までに十分にされていない。

【目的】

発現打突と勝利に関係性があるのか証明し、剣道に於ける戦略を提言する。

【方法】

＜調査大会＞

全日本学生剣道優勝大会２０１２年、２０１１年、２０１０年の過去３年分の優勝校の試合。

団体戦であり、勝負が決した時点で残りの消化試合は対象外とする。また、試合動画が完全に残っているもののみを対称とする。

＜調査項目＞

以下の５つを調査する。

①試合中に発現された打突の本数。②試合中に発現された打突の分類。③１本の有効打突を挟む前後の発現打突の繰り出される割合の変化。④試合開始の初動作。⑤初太刀が繰り出されるまでの時間。

調査項目により使用する試合と使用しない試合に分ける。

【結果】

①勝利した試合（団体）の７１％が発現打突の総本数の多い時であるのに対し、２９％が少ない時である。勝利した試合（個人）の５１％が発現打突の多い時であるのに対し、３７％が少ない時、１２％が同数の時である。試合の流れに左右されない、団体戦の最初に勝敗がついた試合の選手においても、同じような結果が出た。

②過去３年、優勝校とその他の大学共に、面を主体に発現しており、それに続き、小手、引き面の順に多く発現している。優勝校とその他の大学の発現打突の分類の割合、前の技：引き技を表すと、２０１２年の優勝校は８８：１２、その他の大学は７７：２３。２０１１年の優勝校は８３：１７、その他の大学は８０：２０。２０１０年の優勝校は７７：２３、その他の大学は７４：２６。

③対称試合のうち、変化の小さかった５６％が優勝校選手で４４％がその他の選手である。対称試合のうち、勝者の４５％の変化が小さく、５１％が大きい。４％が相手と同じ変化である。試合の流れに左右されない、団体戦の最初に勝敗がついた試合において、勝者の５０％の変化が小さく、５０％が大きい。

④勝者の６１％が初動作に攻撃、３９％が守備の姿勢を見せた。敗者と分けた選手は攻撃・守備共にほぼ半々である。試合の流れに左右されない、団体戦の最初に勝敗がついた試合の選手においても、同じような結果が出た。

⑤勝者の平均時間は７，７秒、敗者が７，９秒、分けた選手が８，６秒であった。ほとんどの選手が１０秒以内に初太刀を繰り出し、偏りはない。

【考察】

①個人・団体共に多く発現打突を繰り出している選手・大学の勝率が高い。

②面・小手・引き面の順で多く発現され、その中でも優勝校は面・小手といった前に出る技を多く発現し、その他の大学は引き面といった引き技を多く発現している。

③発現打突の変化と勝敗との間に関係性はほとんどない。

④敗率・分け率に関しては関係性は見られないが、勝率は初動作に攻撃をしている選手の方が高い。

⑤初太刀が繰り出される時間と勝敗との間に関係性はない。

【結論】

＜証明＞

本数･分類･初動作の3項目は勝利との間に関係性がある。変化･初太刀の時間の2項目は勝利との間に関係性はない。

＜戦略＞

試合開始の初動作に攻撃の姿勢をみせ、試合中は前に出る技（特に面･小手）を中心に、発現打突を多く繰り出すことが勝利へとつながる。